

# 電子キーボードによる ハイブリッド・オーケストラの可能性

～第11回全国大会研究コンサート報告～

中地 雅之

第11回大会において、東京学芸大学における3回目の研究コンサートが開催された。今回は、3名のピアニストを客演に招き、学会員以外の聴衆も多く来場して満席となり、大変規模の大きな演奏会となった。当日のプログラム等は、下記のとおりである。

## 【曲目】

和泉宏隆：宝島

A. シルヴェストリ：Back to the Future

J. S. バッハ：チェンバロ協奏曲 第1番 二短調  
BWV1025より 第1楽章

P. I. チャイコフスキー：バレエ組曲「くるみ割り人形」Op. 71aより〈行進曲〉〈こんぺい糖の踊り〉〈アラビアの踊り〉〈中国の踊り〉〈ロシアの踊り〉

W. A. モーツァルト：3台のピアノのための協奏曲  
「ロドロン」へ長調 KV 242

## 【ピアノ独奏】

ロルフ・ブラッゲ（モーツァルテウム大学教授）

高澤ひろみ 椎野伸一（東京学芸大学教授）

## 【ハイブリッド・オーケストラ】

東京学芸大学 大学院生・学部生 47名

【企画・アンサンブル指導】中地雅之

【音響】五十嵐優 【楽器提供】ヤマハ株式会社

本学には、電子キーボードの専門コースはないが、音楽教育関係の科目において、各種電子キーボードが積極的に活用されている。小中高等学校では、シングルキーボードの使用が主流で、多様なスタイルの楽曲が実状に応じた楽器編成で演奏されている。本学でも、電子キーボードとアコースティック楽器によるハイブリッド・オーケストラ（以下HBオーケストラ）を様々な編成して演奏している。本大会のML部会で「話題提供」で述べたが、これらの教育的意義は、次の6点

にまとめることができる。

## 1) キーボード（ピアノ）演奏の応用

学生は、ピアノ基本的演奏技能を既に習得しているため、その応用として電子キーボードを活用できる。

## 2) 多様な音色・楽器の活用・体験

電子音を含め、自身が演奏できない楽器やパートも電子キーボードによって演奏・体験できる。

## 3) 少人数編成による演奏表現の工夫

大編成の曲を少人数で演奏する際に、原曲を分析してパートの分担や省略等を工夫する必要がある。

## 4) スコア・リーディングの実習

総譜を用いることによって、移調楽器などの読譜練習や、主要パートを選別する実習が行える。

## 5) 編曲・指揮の実習

オーケストラ、吹奏楽、ビックバンドなどの指揮や編曲を、HBオーケストラによって演習できる。

## 6) 教育・演奏の場での活用

大学での演習・経験は、教育実習、また卒業後の学校などでの実践の基礎となる。

筆者がHBオーケストラの活動を学生と行う際の手順は、凡そ下記の通りである。今回の研究演奏も、下記の流れに従って準備を行った。

## 1) 選曲

授業や演奏の目的にもよるが、学生の自主性を重んじて選曲を行う。

## 2) 楽譜準備・編曲（総譜・パート譜）

演奏・編曲のベースとなる楽譜を準備する。これには、管弦楽、吹奏楽、器楽合奏、ピアノ譜、バンド譜、ピアノ譜（含む連弾）など多様な可能性がある。

## 3) 楽器分担

楽曲と演奏人数やメンバーの実状に応じて、電子キーボードとアコースティック楽器の編成を考える。

#### 4) 電子キーボード分担・音色の工夫

各種電子キーボードの特性を活かした編成を考える。あえて原曲と異なる音色を選択することも可能である。

#### 5) 分奏・キーボードアンサンブル

ML 教室で、まず電子キーボードで初見奏したり、キーボードのパートのみで分奏したりする。

#### 6) 合奏・音量バランス調整

合奏の際は、解釈やアンサンブル練習の他に、楽器間の音量バランスに特に配慮する必要がある。

#### 7) 発表・演奏会

学内、地域の学校、公民館など、発表の機会を設ける。本学会は、学生にとってよい目標となっている。

以上の実践を重ねることによって、本学における研究コンサートも最初の第3回大会と比べ、規模が大きくなった。今回は、多様なスタイル―バロック、古典派、ロマン派、ポップスの楽曲を取りあげた。

ポピュラー系の楽曲においては、電子キーボードの活用が不可欠であり、今回はフュージョンバンド T-SQUARE の「宝島」と映画音楽の「Back to the Future」を取り上げた。前者はバンド譜、後者は器楽合奏用の楽譜をベースとした。エレキベースのパートは、鈴木楽器のバスマスターで演奏し、またデジタルホーン、電子鍵盤ハーモニカも編成に加えた。これらは、学生が小学校で訪問演奏をした際の再演であった。

バロック期の音楽として J.S. バッハのコンチェルトを、電子チェンバロ2台を中心に演奏した。これは、学生が自主的に大学祭で演奏したものの再演である。

ロマン派からは、学校でも鑑賞教材として取り上げられる、「くるみ割り人形」を取り上げた。小規模な編成の曲も多く、複数のグループで分担し、今回のために準備した。また、曲間のセッティングに朗読を入れて全体を構成した。フルート、クラリネット、トランペット、打楽器などを加えた編成であった。

今回のプログラムのメインは、古典派の W.A.モーツァルトの3台ピアノのための協奏曲「ロドロン」である。前述のとおり、独奏ピアノの3名を客演として招いた。モーツァルトウム大学のロルフ・プラグゲ教授は、第7回大会の研究コンサーで F. リストの「悲愴協奏曲」を、2台ピアノ版と、独奏ピアノと HB オーケストラ版で2回演奏していただいた。教授は、エリザベート、チャイコフスキーなどの主要な国際コンクールの入賞者であるが、HB オーケストラとの共演を

新たな試みとして肯定的に評価している。今回のモーツァルトの協奏曲も、プラグゲ教授のご提案によるものであった。電子キーボードの音楽的な可能性を広げ、さらに発展させるためには、電子キーボード以外の分野で評価されていくことが必要である。プラグゲ教授の姿勢は、本学の2名のピアノ教授にも伝わり、今回の演奏が実現した。プラグゲ教授は、今回の演奏に対して以下のコメントを寄せている。

「HB オーケストラの響きの体験は驚くべきもので、今日の技術が管弦楽の響きの再現を可能にしていることを示しました。今回の演奏は、音楽実践における電子キーボードの技術が、公開演奏や大学等の実習で一層重要な役割を担うことを、私に、そして聴衆に証明するものでした。電子キーボードは、今後さらに広い領域において、演奏と教育の実践に多様な可能性を開いていくに違いないでしょう。」

今回のモーツァルトの編成は、弦楽器パートを電子キーボードとアコースティック楽器各1名、2名で演奏した。古典派の細かいフレーズの変化を実現するために、弦楽器を加えることは不可欠であった。練習の際には、電子キーボードのみならず、弦楽器にも細かなニュアンスの表現をつけるように留意した。最初の HB オーケストラの練習では、表情の乏しい演奏であったが、回を重ねるごとに良くなっていった。重要なのは、「どの楽器で演奏するか」より、「どのように各楽器で演奏するか」ということだと改めて感じた。「モーツァルトの音楽」自体がイメージできていなければ、アコースティック楽器でも電子楽器でも、それを表現することはできないのである。

今回は、音響ミキシングも大変重要な役割を担った。ホール練習で、五十嵐氏の音響操作が加わったとき、全体の響きが見違えるように豊かになったことに、演奏者一同感動を覚えた。事務局の作業の傍ら、演奏会にもご尽力いただいた五十嵐氏に、この場を借りて改めて感謝申し上げたい。また、今回の演奏の成功を受け、モーツァルト自身による2台ピアノ版の同曲を、2016年7月の本学同窓会コンサートにおいて、高沢教授と椎野教授と HB オーケストラで再演し、好評を博したことを合せて報告する。

(東京学芸大学 なかじ まさゆき)